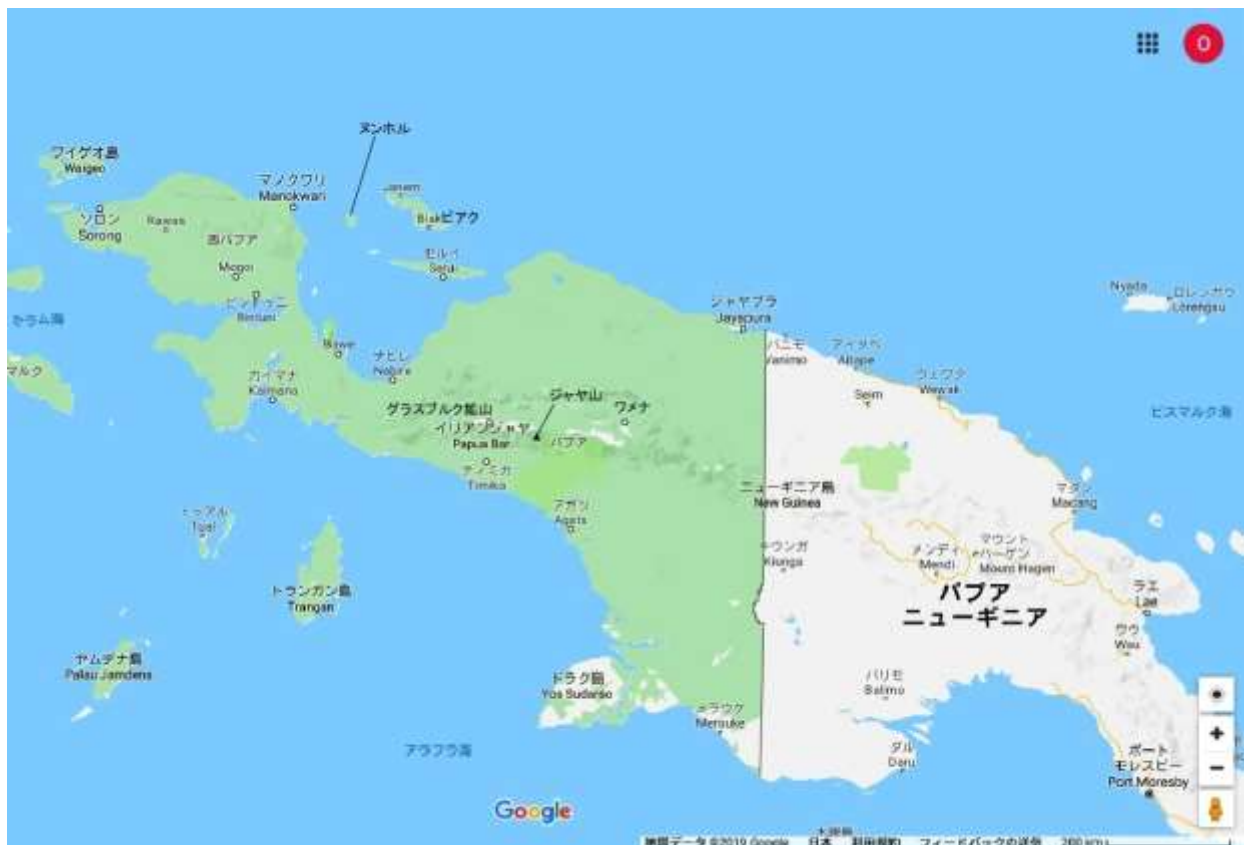


B-1 1 新パプア州

234. 旧名イリアン州



インドネシアの最東部に位置するイリアン・ジャヤ(IrianJaya)州はイリアン島の西半分を占める。インドネシアではイリアン島というが、世界地図ではニューギニア島である。ヨーロッパからの航海者が最初にこの島に来て原住民に接した時、かれらの黒色の肌がアフリカのギニアの黒人に似ているとして「ニューギニア (NewGuinea)」と命名した。いかにも植民地的な命名であるのでインドネシア併合後はイリアン・ジャヤに変更した。

イリアンの語源はビアク語の「日出る所」、ジャヤは「偉大な」の意味である。スカルノ大統領が造ったシンカタン(→964)は「IRIAN=IkutRepublikIndonesiaAntiNederland=反オランダでインドネシアと共に行く」である。近年の分離独立を主張する運動への宥和策としてイリアンに代えて、2002年よりパプア州¹に改名された。

何れにせよパプア (ニューギニア) 島の全面積は 785 千 k m^2 でグリーンランドに続く世界第二の島である。西半分のインドネシア領の 422 千 k m^2 だけでも日本の総面積を上回り、インドネシア国土の 20% を占める。

オランダがティドレ島(→229)のスルタンの主権を取り上げた際にティドレ王国の覇権が及んでい

¹ インドネシア政府は 1999 年イリアンジャヤ州が広大であるため 3 州 (東・中央・西) の分割を法制化した。独立運動の分断化対策であることを住民から警戒され受け入れられなかった。しかし 2003 年 2 月、住民の反対にもかかわらず、同州最西部 (鳥の頭の部分) を西イリアンジャヤ州 (州都、マノクワリ) として分割した。2006 年 2 月、西イリアンジャヤ州の法的地位は定かでないままパプア州だけの州知事選出選挙が行われた。

たニューギニア島もついでにオランダのものとしたが、険しい地形、異形の民族に恐れをなして近づけず長い間放置されていた。

しかし19世紀のヨーロッパ諸国の植民地争奪戦において、島の東半分にはドイツとイギリスが進出し、西半分がオランダ領と彼らの間で勝手に植民地の縄張りを決めた。

第二次世界大戦後、オランダの東インド植民地はインドネシアとして独立したが、イリアンがインドネシア領になるには複雑な経緯があった。1949年のハーグ協定(→330)でオランダがインドネシアの独立を認めた際には、ニューギニア領はインドネシアの領土から除外されており、その帰属は後日の協議事項とすることで妥協した。

その後スカルノ大統領の率いるインドネシアは新興独立国として植民地解放の旗手をもって任じ、バンドゥン会議(→458)の高揚をバックに、独立時からの懸案であった【イリアン解放!】をスローガンに国内統一をはかり、国際世論に訴えた。

インドネシアの戦争も辞さない強硬姿勢は反植民地の国際世論の支持を受け、1962年オランダは行政権を委譲し、1969年に正式にインドネシアに併合され26番目の州となり、ここにインドネシアの【サバン(→084)からムラウケ(→242)まで】という念願の東西5100kmの国土が実現した。インドネシアにとっては念願の領土であるが、イリアンの住民は“蚊帳の外”に置かれていた。

ニューギニア島の東半分はオーストラリア領(信託統治領を含む)であったが、1975年にパプア・ニューギニア国(→465)として独立した。⇒432.イリアン問題の原点

235. イリアンのジャワ化

インドネシアは東に向って脈動している国であり、次のような言い方がある。ジャワ島・スマトラ島は《過去の島》、カリマンタン島・スラウェシ島は《現在の島》、そしてイリアン(パプア)島こそ《未来の島》である。イリアンにはインドネシアの未来がかかっている。

ニューギニア島の森林資源もほとんど手をつけられずに残っている。鉱物資源では石油、ガス、銅が発見されているが、その他の資源の調査もこれからである。ニューギニア島は険しい山地と広大な湿地で人口密度(5人/km²)は極めて低く、原住民以外の居住は海岸周辺部に限られていた。

問題はインドネシア人と原住民の間の隔絶した壁である。そもそもニューギニア島の原住民はパプア系民族であり、モンゴロイドの一般のインドネシア人とは別系統の人種であり、一部の海岸部を除きインドネシアとは文化の共通性も全くない。

原住民の中でも言語、文化を異にする様々の部族が分れて住んでおり、地理的、自然的条件による隔絶状態から、中には石器時代そのままの種族もいる。原住民の部族間は首狩りを応酬する敵対関係であり、同胞意識が育つ環境も歴史もなかった。

インドネシア各地からの移住民が定着するようになった。一般的なパターンは最初に進取の気質のブギス人(→617)がやってくる。その後から華人がよらず屋をひらく。支配者はジャカルタからやってくる軍人であり、役人である。

それから政府の移住政策(→724)によるジャワ人の農民が大挙してやってくる。自発的移住者以外に政府のジャワ農民の移住政策は当初は5年間で5.2万人の計画であったが、1993年より年5.2万人に改められ、イリアンへの移民の増加に拍車がかかってきた。

イリアンのインドネシア化が急速に進むにつれ、パプア系原住民は追いやられ少数化しつつある。イリアン生まれの住民は1971年の96%から、1990年には79%にまで減じている。イリアンでは移住してきたインドネシア人が支配し、原住民のパプア系が最下層になるという社会構造が出来上がり、原住民の憤懣^{ふんまん}がつのる。

パプア系原住民の高まる民族意識によるイリアン分離独立問題[⇒D-6章国家分裂の危機]の背景はインドネシア人の侵略によるイリアンのインドネシア化である。移住政策に従うジャワ農民がイリアンの大地を蚕食しているという実態がある。インドネシア化とジャワ化は同じ意味で使用されている。

原住民のインドネシアに対する苛立ち^{いらだ}ちは隠せない。ほっておけばニューギニア島はやがてインドネシア(ジャワ)人に乗っ取られるのは避けられない。

日本の北海道のアイヌ人、アメリカのインディアン、オーストラリアのアボリジニの運命が彼らを待ち構えている。1996年、1998年、原住民のフラストレーションは暴動になった。イリアン州からパプア州への名称変更程度で解決できる問題でない。

⇒626.パプア系民族

236. ジャヤプラ市

パプア(旧名イリアン)州の州都「ジャヤプラ(Jayapura)市」はパプア・ニュー・ギニア国(→465)との国境からわずか22kmの所にある。広い領域の中で不自然な位置であるには理由がある。20世紀初頭、遅れて植民地争奪競争に参加してきたドイツはニューギニア島の東部を占領し西を窺^{うかが}った。これに対してオランダは1858年にイリアン北岸の探険のため戦艦を派遣して今日のジャヤプラ付近を調査した実績を基にドイツの意図するニューギニア全島のドイツ領土化を食い止めようとした。

オランダが東経141度線を不退転の決意の表れとしてその境界に築いた町がホランディア(Hollandia)である。ホランディアがオランダであることはいまでもない。インドネシア併合後、ホランディアはスカルノプラ(Sukarnopura=スカルノの都)に改名され、その後、ジャヤプラに改名され今日にいたっている。要するに20世紀に三つの名前があった都市である。ジャヤプラ(インドネシア語で偉大なる都)はパプア化によりさらにパプア語に改名されることもあるだろう。

第二次世界大戦中、日本軍はニューギニアを占領し沿岸に兵を配置していたが、マッカーサーの率いる連合軍は1944年4月、ホランディアを攻撃し占領した。制空権、制海権を制した連合軍の飛び石作戦に対して兵力を分散していた日本軍は効果的な防衛が行えなかった。日本によってフィリピンからオーストラリアに追われ、「I shall return」の名高い台詞で捲土重来^{けんどちようらい}を計り、マッカーサーは奪い返したホランディアに陣取って日本への反撃を指揮した。フィリピン臨時政府とオランダ東インド政府がホランディアに存在したのもこの時期である。

ジャヤプラはヨス・スダルソ²(Yos Sudarso)湾(植民地時代はフンボルト湾)にある港である。海に迫る山、湾内の小島、背後地のセンタニ(Sentani)湖が美しく風光明媚な土地である。マッカ

² ヨス・スダルソ(Laksamana Muda Anumerta Yos Sudarso)はイリアン開放戦の国家英雄である。1925年中部ジャワサラティガ生まれ、スマランの航海専門学校卒業し独立宣言後すぐBKR-海軍に参加した。各種艦長を務め、1962年イリアン開放の戦時下、オランダの海空からの攻撃を受け乗船した魚雷艇 Macan Tutul と共に沈んだ。

一サーが山の中腹に戦時には豪華な邸宅を築きブリスベンから妻を呼び寄せた。マッカーサー・ヒルという地名が残っている。

町の人口は17万人である。州都であることから軍隊と警察と銀行がインドネシア（ジャワ）人の拠点である。左遷され人で好きで来た人はいない。その他は食詰めて出稼ぎに押しかけた人の吹き溜まり場になっており、地元住民を凌駕している。

産業としてはワニの養殖ぐらいしかない。インドネシアから職業の目途のないままやってきた人が当面の生計を稼ぐのは金の採取である。港付近の海底の泥をすくい砂金採りをすれば、1日0.5～1gの砂金が得られるらしい。

インドネシアは外国からの観光客を積極的に誘致しているが、イリアン・ジャヤへ行くには旅行許可書がいる。コースの定められている団体旅行は問題ないようであるが、個人旅行になると許可書の取得はかなり面倒のようだ。特にパプア・ニューギニア（PNG）との国境付近は制限されていたが、スハルト後はジャヤプラから国境までの陸路は軍の検問が煩わしいが観光客が行くことは可能になったらしい。

237. 戦禍の北海岸

太平洋戦争においてニューギニア島は激戦地であった。日本は北岸を制覇したが、連合軍はポートモレスビーに踏みとどまり反撃した。ポートモレスビーの場所は現在のニューギニア島の東部の南岸、鳥形に見たてられる島の鳥の尻尾の下の部分になる。

動員すべき空軍・海軍がなく戦線の膠着^{こうちやく}に行き詰まった日本軍は熱帯の人跡希な3000mを越える山脈を越えて島を北から南へ横断し、ポートモレスビーに56kmまで迫った。オーストラリア東海岸はその先である。

しかし補給体制を無視した無謀な作戦は失敗し、戦局は転じて1943年の後半からは東から攻めてくる連合軍に追われて日本軍は西へ西へと敗走を続けた。白骨が道標をなすという惨状であった。

制空権も制海権もなく陸の孤島に取り残された日本軍は武器はもとより食料・医薬品がなかった。実にニューギニア戦線に参加した日本軍18万の内15万人を亡くした。その多くは戦闘ではなく、餓えとマラリアの死であった。連合軍から見れば日本軍をジャングルに追い込めば後の掃蕩^{そうとう}はジャングルに任せたようなものである。兵士の間で言われたのは「ジャワ天国、ビルマ地獄、死んでも帰れないニューギニア」である。

ニューギニア戦線の主戦場は現在のパプア・ニューギニア国(→465)であるが、西部ニューギニア戦線といわれた現在のインドネシアのパプア州ではホランディア、ビアック、ヌンホル（Numfor）、マノクワリ（Manokwari）、ソロンが戦場となった。

連合軍は日本軍の飛行場のある拠点を占領するや制空権を確保し、飛行場を拡大して重爆撃機の基地とした。連合軍の目標はフィリッピンを取り返すことであり、主力はニューギニア島からモロタイ島(→231)を経由してフィリッピンへ駒をすすめた。日本が捨て身の抵抗を凶るも所詮は螻蛄^{ろうこ}の斧であった。連合軍の「蛙飛び作戦」は飛行場の無いところはパスしたため、取り残されたまま終戦となり生き残った幸運な日本兵もいる。

ニューギニア戦線の激戦地の跡に日本から遺骨収集船が回航したのは1956年である。インドネシア領域内の戦死者は約5万人とされている。遺骨収集は20年間にわたり4回行われ、1万余りの遺骨は日本へ帰還した。

日本政府はビアック島に第二次世界大戦慰霊碑を建立した。他にも遺族や戦友会の慰霊団がやってきた。戦死した肉親や戦友を弔うためである。入れ替わり立ち替わり団が訪れて立派な慰霊碑が建てられた。建てる方には建てねばならない論理がある。もちろん、地元へは金一封持参による丁重な断りもしているだろう。

地元の住民にとって慰霊碑とはどのように見えるだろうか。ビアック島の地震(→041)の後、慰霊碑の無事だけ確かめに来た慰霊ツアーもあったという。慰霊碑がもたらす対日悪感情も喚起すべきであろう。日本側の関係者が年老いて慰霊碑の面倒が見切れなくなるのも時間の問題である。既に放置された慰霊碑が風化しつつある。

238. 鳥の頭半島

ニューギニア島西端のドベライ (Doberai) 半島³はオランダ領時代には地図上の形状からオランダ語でフォーヘルコップ (鳥の頭) 半島と呼ばれたが、ドベライ半島と改称された。住民はティドレ王国(→269)時代からの交流のせいでパプア系とマレー系との混血である。内陸部の部族と異なり言葉はオーストロネシア系(→563)である。

鳥の頭の目の位置になるソロン (Sorong) の人口の増加は目覚ましい。サフル大陸棚(→016)の石油探索の基地であり、西部のクラモノ (Klamono) 油田からソロン港まで送油管が敷設された。また近海は豊富なマグロ漁場のため、日本のマグロ漁船の基地でもある。イリアンにも熱帯林伐採の波が押し寄せソロンが拠点になっている。

鳥の肩の所になるビアック (Biak) 島は珊瑚礁と熱帯魚で知られている。淡路島の約3倍でインドネシアでは小さな島であるが、今日はジャカルタとアメリカを結ぶ国際線の立ち寄る国際空港である。関西新空港との直通便をあてこんで★の多いリゾートホテルが建設されたが、開店休業らしい。

ビアック島は飛行機によって発展した島であり、飛行場の起源は太平洋戦争にさかのぼる。隆起珊瑚礁の地形による平坦地であることから長い滑走路が得られたため日本軍は飛行場を建設した。ところがこの飛行場を最大限利用したのは連合軍である。

連合軍はビアック島を戦略上の重要地点と認め、1944年5月に島に上陸し、激しい戦闘が行なわれ日本の兵士が1万人以上も戦死した。現在も戦争の残骸が見られる。日本軍のたてこもったゴア・ジュパン (日本人の洞窟) という壕もある。

日本博物館は太平洋戦争中の日本軍の武器が展示してあるだけという粗末な博物館である。リゾート客の客寄せ道具であるが、肝心のリゾート客がいない。

西部ニューギニア戦線に投入された連隊は山形県出身者が多かった縁で山形県とイリアン・ジャヤ州の文化交流が続けられている。

1998年7月にビアック島で OPA(→433)旗を掲揚したパプア系原住民の村が国軍によって掃討さ

³ ドベライ半島についてはチュンドラワシ (Cendrawasih) と記した地図もある。ちなみにチュンドラワシとは「極楽鳥」のことである。

れ、100名以上の死者が出た。スハルト政権崩壊後、東ティモール(→430)とアチェの弾圧(→437)は反省されたが、イリアンでは強硬策(→434)が続けられている。

鳥の口の中になるベラウ (Berau) 湾周辺に埋蔵されている天然ガスを輸出するタングーに LNG 工場(→548)が建設されている。

鳥の顎にあたるボンペライ半島にはロックアートといわれる岩に描かれた不思議な絵がある。ベラウ湾の入口と下顎のカイマナ (Kaimana) 地区である。

ベラウ湾の方は 30km にわたる海岸の崖に人や動物の絵が描かれている。人骨があることから墓であるらしい。石灰岩に赤、黒、白の色彩が使用されている。カイマナは様々なステンシル画である。舟で海からしか近づけない所である。

どちらも交通不便なところであり、ロックアートが描かれた時代や目的は定かでなく、学術調査もこれからである。

239. バリエム盆地

1936年、ニューギニア島中央のジャヤウィジャヤ山脈の上空を飛行中の探検家がバリエム川沿いの盆地に碁盤の目のような地形を発見し耕地でないかと疑った。トリコラ山など周りは4000mを越える山に囲まれた幅15km、長さ60kmの盆地はスケールの大きい大自然の中の隠された谷であった。

陸路からは接近不可能の地であったため、探検家アークボルド (Archbold) が水上飛行機で最も近くの湖へ着陸したのは1938年である。以後、内陸部の探検には水上飛行機が活躍する。

飛行機からの「バリエム (Baliem) 盆地」の景色はヨーロッパの農村ように見えるほどであるが、実際に住んでいるダニ族はペニス・ケース(→790)以外は素裸で鉄を知らない石器時代の人であった。石器と木材の道具だけであるにもかかわらず、ダニ族は農業に優れており耕作地は整然としている。

土地が肥えており、主要作物は根菜である。特にサツマイモの栽培に適していたこと、1600mの高地でマラリア蚊がいないことから、盆地の人口は当時で5万人、現在は10万人で人口密度は相当高い。

第二次世界大戦中にニューギニア島が戦場になった際に偵察飛行に出かけた米国の飛行士は暇にまかせて“シャングリラ”との評判がたったバリエム盆地を偵察した。戦後、米国でキリスト教布教団が編成されたのも豊富なデータのおかげである。

最初の宣教師は落下傘で降りた。後はアメリカ式物量作戦によって7ヶ月で飛行場ができた。高地に最初に進出してきたのは政治権力ではなくキリスト教である。布教は困難を極めたが、改宗の成果は現れ、部族戦争と殺した相手を食べることは止めるようになった。飛行場がオランダの行政の拠点となり今日のワメナ (Wamena) の町になった。

1963年にニューギニアがイリアンと名を変えてインドネシアに併合されて以降、政府は学校や医療所を建設し住民の福祉のアップに努めている。もっとも学校はインドネシア語を教えるのが最大の目的であった。

インドネシア併合の過程で1977年に住民はインドネシア支配に反乱した。伝統的な戦闘ダンス(→924)を誇示して威喝したが、銃の威力にはいかんともしがたく降伏した。その際にインドネシア軍が

いかに住民を残酷に扱ったかがノーマン・ルイス著『東方の帝国』に記されている。その後遺症はイリアン独立問題として尾を引いている。

石器時代の住民へインドネシアの政治支配とともに自動車や学校やあらゆる物が飛行機で持ちこまれた。イリアンの治安問題から外国人に閉ざされていたが、近年は“シャングリラ”の宣伝文句によって観光客もやってくるようになった。

バリエム盆地は徒歩によるならば海岸から1ヶ月はかかるというたいへんな所であったが、自動車道路の建設が進められている。

⇒627.ニューギニア高地人、664.ヤリ族

240. 最高峰のジャヤ峰

20世紀になるまでニューギニア島の地図の中身は真っ白であり、世界の探検家は挙って内陸部を目指した。雪のある山の噂は飛行機で確かめられた。世界に冠たる英国の探検隊がニューギニア島の最高峰登頂に関心を持つや、オランダは国の威信をかけて自国領の最高峰登頂計画に参画した。

1909年にロレンツ (Lorentz) はウィルヘルミナ (Wilhelmina 4732m) 山の雪線に達した。山名はオランダ女王の名にちなむ。1913年にオランダ隊はウィルヘルミナ山の登頂に成功した。現在はトリコラ (Trikorā) 山⁴に改名されている。

赤道近い位置 (赤道の400km南) にもかかわらず標高4500m以上は“雪”が降る。しかも万年雪になるから氷河もある。オランダ領時代は「スネーウ(雪山)山脈」と呼ばれた。

探検隊のポーターにはカリマンタン島のダヤク人(→624)が重宝された。彼らは暑さのみならず寒さにも強かった。ダヤク人は始めて見る雪に興奮した。首狩り(→625)の罰に刑務所代わりにポーターをさせられたものである。

その後、ニューギニア島の最高峰はカルステンツ (Carstensz) と呼ばれる山群にあることが分かった。1923年にヌガプル (Ngga Pulu 4860m) 峰に登頂したが、1962年になって最高峰はジャヤ峰 (Puncak Jaya 4884m) であることが確認された。カルステンツは17世紀に島の中央の高山に雪があることを始めて報告した白人の名にちなむ。

ニューギニア島の中央を東西に貫く脊梁山脈は西部ではスディルマン (Sudirman) 山脈、中部ではジャヤウィジャヤ (Jayawijaya) 山脈、東部ではウィスムトイ (Wismurti) 山脈と連なっている。全山系を通してマオケ (Maoke) 山脈ともいわれる。西部と中部は4000m以上であり、ジャヤ峰はスディルマン山脈にトリコラ山はジャヤウィジャヤ山脈にある。

イリアンの山系は火山でなく山塊である。300万年前の第三紀の若い褶曲山脈で山脈である。地球の歴史からみれば若い成長盛りの山脈で、1インチ/年という驚異的スピード (計算してみると100年で2.54mである) で伸びている。

スディルマン山脈の僥倖^{きょうこう}というよりは不幸は金銀銅の豊かな鉱脈があったことである。1936年に山脈の高地で銅が発見されたが、ジャングルの中に屹立^{きつりつ}する人跡未踏の高山の資源を掘れるとは誰

⁴ トリコラはスカルノ大統領当時、イリアン開放戦は民衆を含む三者の戦いの司令部 (Trikorā = Tri Komado Rakyat) の戦いとして発表し国をあげてのスローガンとなった。

も思わなかった。しかし土木工学の進歩は不可能を可能にした。

フリーポート社(→534)によってジャヤ峰に隣接するエルツブルグ山は露天掘りで山容はえぐられて無残な姿になっている。現在の採掘の主力はグラスブルグ山に移っている。金銀銅の鉱脈は他の峰に続いているらしい。イリアンの山が鉱山会社によって根こそぎ破壊されている。

ジャヤ峰を含む一帯はロレンツ (Lorentz) 国立公園⁵としてユネスコの世界文化遺産に登録されている。フリーポート社操業の鉱山は世界自然環境破壊の最有力候補であろう。

2 4 1. グラスブルグ鉱

イリアン・ジャヤは金銀銅の鉱物資源にめぐまれている。現在稼働しているフリーポート社のエルツブルグ鉱と「グラスブルグ (Grasberg) 鉱」は 3000 足の高地にあるため、近くの平地のティミカ (Timika) に空港がある。ティミカにシェラトン・ホテルがあるのも鉱山町故である。その奥にあるトゥンバガプラ (Tembagapura) が鉱山のベース基地である。トゥンバガプラはインドネシア語で“銅の都”という意味である。

ティミカからトゥンバガプラとの間の約 100km の道路が建設されている。距離は短い急坂とカーブの連続でよほどの運転技術でないと谷底に落ちること必至らしい。精鉱は道路脇のパイプによるスラリー輸送で海岸のアママパレ (Amamapare) に通じている。そこから世界各地に積み出される。日本は搬出先の大手である。

同鉱の 1.7 万人の従業員に加えて 2 万人の人が生活している。これらの人はインドネシア人であってもジャワ島などから移住してきた人であり、地元のパプア人もいるが 10%程度にすぎない。日本でいう企業城下町というよりはアメリカ西部開拓時代の砦である。約 700 人の白人の住む芝生のある高級住宅はヒドンバレーという高地にある。多分、ジャングリラかと錯覚するような存在であろう。

現在稼働中のグラスブルグ鉱山は露天掘りで銅を産出している。金銀も副産物として採取され、世界最大の金の埋蔵量といわれる。

何気なく見ていた雑誌に掲載⁶された航空写真は衝撃であった。イリアン最高峰ジャヤ峰の氷河の下に鉱山があり、その下は熱帯ジャングルである。赤道直下の露天掘りの鉱山の大パノラマが展開される。しかしこのパノラマは自然破壊のスケールの大きさを誇示するものである。

環境破壊・自然破壊の深刻さは航空写真からもうかがえる。鉱床を覆う岩石は剥ぎ取られて谷を埋めている。鉱山からの土砂は川を汚染し鉱滓から有毒成分の浸透し下流の生態系を破壊し住民の生存を脅かしている。

アイクワ (Aikwa) 河口は繁茂したはずのマングローフ(→006)はなく地面はむき出しである。所々に前衛芸術のような立ち枯れの木が残っている。鳥獣も魚もいるわけがない。熱帯の“三途の川”はかくなるものかと思わせる風景である。

⁵ 独立後、植民地時代にオランダ人の名から命名された固有名詞は全て改名されたはずであるにもかかわらず、ロレンツ国立公園のインドネシア名が明らかでない。インドネシアがロレンツだけを除外する理由はあるのだろうか。また欧米の登山家にはニュー・ギニア島最高峰としてカルステンツ山群の名が一般的であり、インドネシア語命名は使用されていないようである。

⁶ 『NATIONAL GEOGRAPHIC (FEB 1996)』

会社に反対する住民には軍隊が出動して弾圧してきた。鉱害問題と人権問題で糾弾^{きゅうだん}されるフリーポート社はNGO関係者など外部からの訪問者を警戒している。ティミカから鉱山に向かう道路は会社の私道であるから一般の車は通行できない。検問が数カ所あり外来者を締め出している。まるで“007の映画”に出てきそうな超悪党の要塞である。

そもそもイリアン・ジャヤは石器時代の原住民の住む所にいきなり近代経済社会が暴力的に侵入してきた。ティミカ空港の建設にも部族が動員された。会社が支払った労賃がコンビーフ缶詰だけであったので“コンビーフ空港”といわれる。

⇒534.フリーポート社、551.金銀銅

242. タナ・メラ/流刑地

ニューギニア島は巨大な島であるから所により気候も異なる。北部と中部山岳地帯は年間8000mmにも達する膨大な雨量にみまわれる所もある。これにひきかえ島の南側はオーストラリア大陸の影響を受けることから雨季と乾季の明確な熱帯サバンナ気候である。

島の南側の地図の広大な緑印はマングローブやスワンプの湿地帯に見えるが草原も多い、といっても決して住みよい所ではない。平地であるため100kmの内陸部まで潮の影響を受ける。拠点のアガツ (Agats) は泥の上の町である。彫像で有名なアスマット族(→665)の村への入口である

20世紀まで文明に浴することのなかった地であり、首狩り族や食人族の横行する土地であった。キリスト教の布教で首狩りと食人の蛮行は止めたらしい。1961年にアスマットの原始芸術に魅せられてその収集に訪れていたアメリカのロックフェラーの御曹司⁷が行方不明になった。鯨の犯人説もあるが、人に食べられたという噂が広がった。

ムラウケ (Merauke) は国境の町である。太平洋戦争中も日本軍占領から免れた唯一の蘭印の領土としてオランダ国旗がはためいていた。インドネシア独立後、イリアン解放運動において【サバン(→084)からムラウケまで】とイリアンが不可分のインドネシア国土であるというスローガンがあふれた。日本でいう「北は北海道から南は沖縄まで」と同じ愛国の心情表現である。

ディグル (Digul) 河の上流のボーフェン・ディグルはインドネシア語の「タナ・メラ (Tanah Merah)」で知られる。オランダ植民地時代に設立された政治犯収容所⁸として悪名高い。タナ・メラはインドネシア語で“赤土”であり、共産主義者をも意味した。

1926-27年に共産党は準備不十分なまま蜂起(→288)し、結果的には大量の逮捕者をだただけで基盤の脆かった共産党は壊滅した。共産党の自滅は勝手であるが、結果的には盛り上がってきた民族主義運動の機運に水をかける暴走であった。

共産党員も含む多くの民族主義者の逮捕者を収容した所がタナ・メラであり、収容者は3千名にも達した。マラリアなどの猖獗^{しょうげつ}の地であり多くの政治犯がそこで病死した。タナ・メラの名は独立運動の象徴となった。

⁷ マイケル・ロックフェラーはニューヨーク州知事、アメリカ副大統領になったネルソン・ロックフェラーの息子である。彼の収集したアスマット族の芸術品はメトロポリタン博物館に寄贈されている。

⁸ オランダはVOC時代から反抗しなくても従順でない王族や貴族は当時オランダの支配下にあったセイロン島かケープ植民地に流刑にした。セイロン島かケープ植民地が英国に移譲されてタナメラに新たに政治犯収容所が開設された。〈編者註〉スリランカのコロンボにはいまだにSlave Islandという奴隷集積所の跡がある。

インドネシア専科

後に独立したインドネシアの指導者となるハッタ(→443)とシャフリル(→444)などの民族主義者もここに収容されていた。政治犯は3グループに分けられていた。一般の収容者は最低限の食糧は与えられた。釈放の見込みのあるグループは軽作業を行いながら賃金を得た。反抗的グループは水も不便なさらに山奥の僻地で自活をさせられた。

ハッタとシャフリルは特別待遇であった。この大物の二人は途中でバンダ島(→232)に移されたのはタナ・メラがあまりにも悪名高いだけに、ハッタとシャフリルがそこで死んだ場合のインドネシア人の憤激^{ふんげき}を恐れたからである。

独立後、インドネシア民族主義者のイリアン（ニューギニア島の西半分）併合への頑^{かたく}なまでの固執は多くの民族主義者がそこで亡くなったという情念である。

著者 大槻 重之 (おおつきしげゆき)



著者略歴

- 1938 京都府綾部市に生まれる
- 1961 大阪大学経済学部卒業
関西電力入社
以降主として燃料業務に従事
- 1998 関西電力退職後三田市に居住

- 著書 「燃料が電気をつくる」 1972
「インドネシア百科」 1991
「バリ島百科」 1992
「マレーシア百科」 1993
「続・インドネシア百科」 1994
「石炭をゆく」 1998

インドネシア専科 B地誌編 (上巻)

発行日 平成 19 (2007) 年 8 月 10 日
著 者 大槻 重之
発行者 大槻 重之